



A C A Cで開催中の小田原のどかさん個展「近代を彫刻／超克する」の展示風景

## 近代彫刻の歩み多角的に

### 小田原のどかさん A C A Cで個展

青森市の青森公立大学国際芸術センター青森（A C）で、彫刻家・評論家の小田原のどかさんによる個展「近代を彫刻／超克する」が開幕する。後藤伍畏像として知られる大熊氏広作「雪中行軍遭難記念像」など県内の野外彫刻から、日本の近代彫刻の歩みや課題などを多角的な視点で考察している。



アーティストトークで展覧会について話す小田原のどかさん

仙台市生まれで、父親が南部町出身の小田原さんは、近現代や戦時下の日本の彫刻を作品と文章によって批評する活動を行っている。今回は、A C A Cの「表／地」としての野外彫刻プロジェクトの一環で県内の彫刻を調査し、その成果を発表した。

小田原さんは、「雪中行軍遭難記念像」と高村光太郎作「乙女の像」という八

甲田の北と南に立つ銅像に着目。奥行きのあるキャラクターで真っ先に目に飛び込んでくるのは、同記念像の台座、行軍犠牲者の墓標をそれぞれ紙と木で原寸大に複製した小田原さんの作品。その中に大熊の彫刻、素描などが隣り合う。

雪中行軍の道程を表現した長いカーブを進むと「乙女の像試作第一号群像」（県立郷土館所蔵）などの高村作品が現れる。周りには土産物として作られたミニチュアの乙女の像が並び、複製され増殖していく「彫刻」の宿命も暗示している。

大熊、高村の作品群の間にあるのは2種類の粘土で作った「山」。大熊が彫刻を学んだ日本初の国立美術

学校・工部美術学校を油粘土、高村が学んだ東京美術学校（現東京芸大）を水粘土で表し、日本の近代彫刻史の分岐点も表現した。

昨年12月の展覧会初日は、同センターとオンラインでアーティストトークを開催。小田原さんは「細く閉じた独特の展示室を生かして、八甲田の表から裏へ

山を越えて戻る体感を表現した。そこにさまざまな歴史的分岐点も重ねているが、風化しつつある雪中行軍の悲劇も、一つの歴史史の分かれ目だったと感じる」と語った。

同展は2月13日まで。入場無料。問い合わせはA C（電話017-764-5200）へ。（沼田典子）